

〈言語〉派行為論の 基本構図 (3)

橋 爪 大三郎

なぜ〈言語〉派行為論か？

行為の統合構造仮説

旧石器・統合構造の展開 (以上、30号)

失行症と行為の秩序 (以上、前号)

言語と行為との絡まり

〈言語〉派行為論の戦略的位置 (以上、今号)

言語と行為との絡まり

この節では、前回の予告通りに、言語と行為との絡まりあいについて、できるだけ突っこんだ論究を試みよう。

行為のあり様はたしかに、言語によってかたどられている。ところでわれわれはまず、実際言語が行為をとらえる仕方を、ふた通りに大別しておくのがよい。その一方は外的な制約であり、もう一方は内的な制約である。外的な制約とは、どこかですでに確立している言語のメカニズムによって、行為が外的な規制を被るような場合、たとえば命令であるとか、内言による行為の統制であるとかをいう。それに対して、内的な制約とは、行為に内在する秩序 (たとえばその統合構造) が言語のそれと、もっと密接な

例は、そもそも存在しやうがないのである。こうして、言語が行為を内的に拘束するものかどうかについては、誰しも決め手を欠いてしまっているようにみえる。

ただ、いまのべた事情 (症例の欠落) をきちんと評定するためには、失語の本態について精確な見取りを与えておく必要がある。かりに神尾 (一九七九) の仮説するように、失語が文法を犯すものでないのだとすれば、症例の欠如それ自身がかえって、言語ならびに行為の高次精神機能同士がかならず密接な相関を保っているに示唆しているのだ、とも考えられる。そも文法を犯すほどの障碍は、内言や思考の過程、さらには行為にもかわる知力全般を低下させてしまい、人間の解体をまねくほどの深い障碍として生ずるしかない、ということだからである。

症例を根拠に言語と行為との内的な相関のありさまを説明する途がまったく閉ざされているかという点、そうではない。ある種の精神障碍などは、たしかにそのような手がかりを与えうる症例だと思われる。わたしの予想によると、脳の器質的な損傷にもとづかない分裂的な精神症状 (の一部)こそが、言語と行為の統合構造の潰乱ないし解体症状として、再発見される可能性がある。

この作業を遂行するには、人間の行為を一連の形態素へと解きほぐし、その上でそれにかかわる統合関係を発見・記述していく手続が必要となるであろう。これまでシャルゴンとして聞き捨てられてきた患者の発語を、逐一記録し、併せて患者の行為を克明に記述しておいて、記号論的な分析にかけるのである。残念なことに、既存の研究のなかからは、そのような分析結果を利用可能なかたちでみつけたことなど、いまのところできない相談である。

相関を保つ場合、たとえば両者が発生的に同根であるとか同一の形式的な制約に服しているとかいう場合をいう。〈言語〉派行為論はむしろ、言語が行為秩序を内的に制約するものであると想定しているが、このような事実が明らかとなれば、外的な制約だけを想定するたぐいの社会理論、たとえば適応理論や条件づけの理論に対して、はつきりと優位にたつことになると言えよう。

言語と行為とが内的に相関するのではないかという指摘がこれまでさして多くなかったのは、それを直接裏付けるような証拠を見つけないのが難しいことも、ひとつの理由だったのかもしれない。言語が行為秩序の形成に深く与っているということがあれば、その裏返しとして、言語 (のみ) が欠ける場合に行為秩序までが損なわれてしまうということが、当然あってもよさそうである。ところが脳神経学の知見をひっくりかえしても、それにあたるような症例は存在しない。言語と行為とがいかに相携えて発展しようとして、やがてそれは、独立に障碍されうる別々の精神機能として定着する。このように相互形成と態勢化が十分にすすんでからの段階では、失語のような言語のみにかかわる障碍が、統一的に行為とまでを障碍してしまうということはない。他方、言語と行為とが相関し互いの形式と内実とをかたちづくっていく本当の発生期にあつては、部分的な脳損傷ぐらいでは言語が脱落するということとはなくて、失語症状が次第に軽癒し、言語が再生してしまう。(大脳皮質は十分可塑的であつて、いわば、いたるところ言語能力でみだされている。) だから、幼児失語症の場合も、われわれの求める症例でない。つまり、言語 (のみ) が欠けた場合に、本質的に言つて、行為にどのような障碍が生じるかを示すような症

この方面でこれまでに試みられた研究が、およそそのような関心と方法を欠いていたのだから、致し方ない。わたしのみるどころ、精神障碍は、言語・行為・認知の根深い協応不全にもとづく病像を与えている。その本態を記号論的に説明する試みは、このところ足踏み状態をつづけている精神病理学に突破口をひらくかもしれない。このテーマは本稿の作業とも密接に関連するはずだが、ここで深入りするにはちと広がりすぎる。そこでいまはたんにこれをわれわれの課題にかぞえることを確認するだけにしておき、以下では、(その前段作業にもあたるのだが) 行為にかかわる言語の内的制約を形式化してとりだそうとする興味深いひとつの試み——行為の格理論——に注目してみよう。

*

巨明志による行為の格理論は、格の概念によって行為を形式的に記述・分析しようとする、有望なひとつの仮説系である。この理論の着想は、フィルモア (C. J. Fillmore) の「格文法」(Case Grammar) の考え方をもとにしているもので、われわれはまずこれから理解しなければならぬ。

学校などでふつう教える伝統的な文法でも、主格とか、所有格、目的格とかいうような、格の概念がいちおう用いられていた。格文法にいう「格」は、こうしたものとは異なる。フィルモアは、チョムスキー以来の変形成文法のモデルに依拠しているのだが、この理論的立場からすると、こうした伝統的な文法の格は、文の観察可能な表層の諸要素のあいだに割りふられた機能的な関係にしかすぎず、「表層格」とよぶべきものである。これに対して、

フィルモアが自分の理論の基礎に描いているのは、むしろ文の深層構造において各要素が述語に対してもつ関係を規定する、「深層格 (deep case)」である。フィルモアは、変形生成文法の主流の理論家たちとは異なり、ほかならぬこの深層の格関係によって、文の統合構造を理解しようとする。しかも、この深層格は、すべての言語に共通して見出されるはずの普遍的な言語事実であるという。ごく少数の深層格を樹てるだけで、各国語の文法をひとつのこらず書きあげることができると主張するのが、格文法なのである。

実際にどのような格をいくつぐらい樹てればよいのかについては、フィルモア自身、何度か違った提案を試みている。しかし、そうした細かな文法論上の議論より何より、はるかに興味ぶかいのは、この普遍的な格をいかに解釈するか、であろう。格文法の主張が妥当だとすれば、それはじつに驚くべきことである。いったいなぜ、人間の言語はかならず、ある一定の種類格を下敷きにするということになるのだろうか？ フィルモア自身は、これを、人間の認識や行為を、普遍的で生得的なある種の態勢づけの型が支配していることのあらわれではないか、と示唆している。つまり、人間は、深層格で記述されるようなある一定の型を通すのでなければ、およそものごとを経験することも理解することもできない。認識したり行為したり発語したりできない、というわけなのだ。

そこで、行為の格理論に話をもどそう。この理論は、いまのべたような格文法のアイデアを、行為秩序の解明にまでおし広げようとするものである。そこで主張されるはずのことから整理しようとする。

(i) N…近傍を定める。
(ii) D…志向する対象を定める。
(iii) D…対象志向性のX自身への回帰。

がえられるが、この三つこそが、ほかならぬ行為II認知図式の内容を構成する、とされる(巨〔一九七九：一二七〕)。

行為の記号的秩序の最も基本的な関係をあらわすこの行為II認知図式が、そのまま、言語的意味の基本関係を与えるものであるのではないかと考えるところに、行為の格理論の核心がある。《…言語的意味の基本関係を、言語的意味の「素粒子」とも言うべき「格」を説明するさらに深いレベルの要素であるという意味で「格のクォーク」と呼ぶ。格のクォークとは、行為II認知図式が言語レベルにおいて相即的に表現されたものである》(巨〔一九七九：一二九〕)

そこで実際、行為II認知図式を用いてフィルモアの与えた深層格を分析するところから、巨はつぎのような対応をひきだした。

- (1) 動作主格 $[X]Y = D^{-1}(Y)$ または $X = D^{-1}(Y)$
- (2) 経路格 $[X]X = N_p^{-1}(Y)$
- (3) 道具格 $[X]X = D^{-1}(Y) / (X + USE)$
- (4) 対象格 $[Y]Y = D_p(X)$ または $Y = D_p(Z) / D_p(X)$
- (5) 源泉格 $[X]X = D^{-1}(Y)$
- (6) 目標格 $[Y]Y = D(X)$
- (7) 場所格 $[X]Y = N_L(X)$

てみるなら、ふたつあると言えよう。まず第一は、格文法のたてた深層格を、もっと基本的な要素(格のクォーク)にまで分解してしまい、そうした要素から構成されたものとしてぎやくに深層格をとらえ定式化すること。この結果、深層格の合意や論理機制が見透しやすいものとなり、行為や認識との携がりもずっとはつきりしてくる。第二には、この深層格を理論の中心部に組みこみ、行為をその統合構造に即して記述・分析しうることを示すこと。この野心的な試みが成功するなら、言語や行為の外形とそれを支える心的領域とを一貫して論じうる実証的な理論を、われわれは手に入れたことになる。そこで、これらの主張を順にみていくでしょう。

行為を分析しようという場合に行為の格理論が出発点とするのは、行為II認知図式である。巨はこれを、公理のように措くことを提案している。

《…行為II認知図式を公理として組み込むことによって、行為による世界の構造化に関与する諸項の基本的意味関係を基盤にして、行為の統合構造を記述し説明しようとする理論を、行為の記号論のなかでもとくに「行為の格理論」と呼ぶ。》(巨〔一九七九：一三一〕)

行為II認知図式は、前節で失行症を扱ったときに出てきた身体図式と、つながりが深い。巨の整理によると、身体図式は、

- (i) 自空間を外空間から分離する、すなわち自空間の範囲を確定する。
- (ii) 自空間を外空間内へと定位すべく外空間へ向けて方向づける。
- (iii) 自空間を外空間内に定位されたものとして自己身体像に繰りこす。

(8) 時間格 $[X]Y = N_t(X)$

以上が、行為の格理論の主張点の、第一点であると言っている。この第二の主張点は、行為の統合構造が、このように分析された一連の深層格を使って明快に記述できる、という内容になるはずである。行為を実際にどのように分析するのか、その具体的な方法は、公表された論文のなかには与えられていないけれども、格関係が、行為の連鎖を統合づける抽象的な構造を与える仮設構成体として、(これまで提案されたどんな理論と較べても)きわめて有効と予想される点は、強調されてよい。この利点を当然としたうえで、われわれはあえていささかの批判的註解を試みることにする。

*

行為の格理論は、言語と行為との相関を、とりわけ言語における格関係と行為II認知図式との実質的な関連として、確証しようとするものである。このように言語の実質にかかわる説明原理を行為を記述・分析する理論装置としても使用しようとする以上は、いくつか解決しなければならぬ論点が前途に閥門として控えてゐると覚悟しなければならぬだろう。(ということはもちろん、このような特定化された主張ほど、裏づけをえた場合の理論的な貢献度が高いという点の反面でもある。)

だいたい、格の概念は、実際行為分析に有用なものなのだろうか？ 行為秩序が言語秩序と実質的に相関するのだとしても、言語の分析に有用であった手続きがそのまま行為分析でも重宝するとは限らないはずである。格の概念が役に立つのは、格文法が

言語に関して想定しえたのとはほぼ同様の前提を、行為に関して描くことができるような、特別の場合であろう。格はもともと、文のなかで述部動詞と他の文構成素とのあいだに成立つ意味的な関係として、樹てられてあつた。そのため格は、(深層の)述部動詞(行為の意味化された像)が行為の状況のなかではらむ、多様な空間的關係の分類原理であるという、基本性格をもっていると思われる。ひとはことばを話すとき、このような空間的關係をやむをえず時系列的な発語のつらなりへと置きかえていく。このための規則である限りで、格(文法)は統合構造に關与することができていたはずである。それにひきかえ、行為は、(格關係をなしたたせる中心となるような)述部動詞(の相当物)をもっているわけでもないし、本来空間的なものでもなさそうである。それゆえ、行為がみずから展開する多様なさまを統合づけるものとして、いきなり格(だけ)を持ちだすのは、飛躍がすぎるのではないだろうか？

また、(いまのべたことも關係するが)格關係は實際どれほどの長さの行為連鎖を支配するものと考えられているのだろうか？行為の連鎖には、ちょうど文に相当するような中間的なまとまりがあるのだろうか？ いったい(格文法をはじめとして)文法理論の扱う対象は、事実上、文(sentence)に限られている。文を超えるようなことばのつらなりがどのような秩序をもつかなど、ほとんど知ったことではないのだ。談話分析や物語分析の試みもあるが、歯切れのよい結論をうんでいないというのも、おそらくそうしたところでは言語外的な要因——談話をめぐる発語の状況であるとか、物語の展開を支える思念の流れであるとか——

も大きく作用するためであろう。そこは、基本的に、人間の自由の領域である。格關係の分析的な有効範囲は文を超えてるものではなかったのだが、その伝でいくと、行為分析の場合にも格概念の有効範囲はある一定限度たとえば一定程度の自動化の及ぶところまでに限られ、それを超える自由な行為のつらなりには適用できない、ということがあるのではなからうか？

これらの論点に対して、行為の格理論が遠からず然るべき解決をもたらすことは、十分に期待されるが、ここではやや別様に、言語との絡まりからみた行為分析の見取りを与えるを試みよう。

行為の統合構造は、(個体の)行為の連鎖に見出されると想定される秩序であつた。このような連鎖をどこまでもたどってゆくとすると、ついにはその上限に、すなわち誕生から死にいたる人生の全長に、至りつくと考えられる。ところでこうした行為の連鎖を意のままに実現しようとしても、できない相談である。なぜならば、ひとが行為の自由な主体として存在するあいだは、この行為の連鎖はまだ終結していないわけだし、終結してしまつたときにはもう行為主体のほうが存在していないはずだから。この例は極端であるので詭弁めいてみえるかしらないが、人間の行為はおおむねこのような逆説を不可避的に含むものではないかと思われる。行為のつらなりは、ただそこにあるというふうにして、行為者のまえに存在するわけではない。かといって、まったく行為者の自由に服するといういみみで行為者の手許にあるわけでもないのである。行為主体という、ふつう行為を自在に操るもののように考えられやすいが、そうではなく、行為の外におしだされて

しまつてあり、あべこべに行為の連鎖に組みこまれそこにつなぎとめられているとも言える。

行為秩序のうち行為者の自在に実現できる部分を、かりに行為の手許性とよべば、われわれのしるたいの行為は、そうした手許性には収まりきらないで拡がっている。行為が自在になるのは、行為系列全体のうち、現在という時点で露頭するほんのわずかな部分であり、残りの部分は、すでに実現されてしまつたかあるいはまだ実現されていないものとして、後景に退いている。このように行為者は行為の現在に緊縛されている。緊縛の内容は二重である——ひとつには、現在ならざる行為の過去や未来をひとは自由になしえず、行為の過去や未来に緊縛されてあるということはありえないこと、もうひとつには、ひとはいかにしても身体

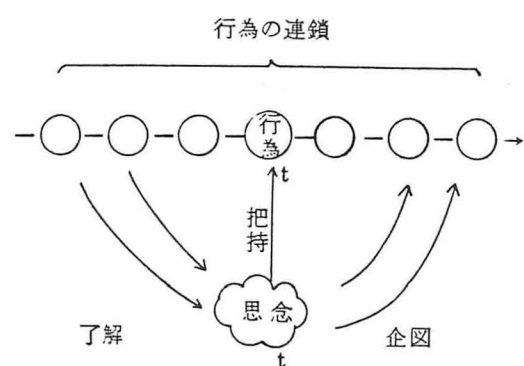


図14 行為の現在

であることを解消できず行為をしないですませることができないといういみみで、行為の現在を脱出することができないというこ。この緊縛とは、逆にみれば、行為の現在を相対的な極小部分に押しちぢめてしまうほど、人間は自分の行為に

せ、射程を拡大させているということでもある。もちろんこのよ

うなことは、刻々の動作をいみづけつづける高次の精神機能の持

続的なはたらきによって、ようやくと可能になっていくわけだ。

以上のようなので、行為は本来過程的である、と言わなければならぬ。生成文法は、発話行為の過程的な性格を捨象してしまつるところに理論を組立てることができたのだが、同じく統合構造を扱うといつても、われわれの場合はいかにない。そのため、外形的に観察可能な行為連鎖と並行して、それを裏付けるそのときどきの思念のはたらきを想定し、はつきり視野に収めておく必要があるのだ。われわれの行為は、個々ばらばらのものとしてとりだしてみれば、内容のきわめて貧しいものである。

それら行為は、明らかにそれなりの形式的特徴をそなえていて、他の挙動一般から区別できたりはするであろう。しかし、その全体的な文脈から切りはなされてしまふなら、それだけではほとんどなんのいみも持つことができないにちがいない。したがって、個々の行為の内容が貧しいものである分だけ、それが託される社会的文脈や当事者たちの意味づけはかえって部厚く重層したものにならざるをえない。さもなければ、そうした行為をあとからあとから過程的に積みかさねていくことなど、できるはずがないから、われわれの行為秩序は、条件反射の複合により支配されているわけでもないし、リリーサーのような環境要因によってそのつど開発されるようにあらかじめプログラム化されてあるといったものでもないのである。

ところで思念は、行為のためになにするのか？ 行為をいみあらしめているものの文脈は、広大にひろがって

る。行為の現在に繋ぎとめられてある行為者が、持続する行為の主体として現われるためには、行為の広域にわたるつらなりの様を（その都度）行為の現在へ（心的に）回収し、把持しているでなければならぬ。（心的領域のそうした活動が豊かなものであるほど、行為もまた内容あるものとなる。）だから行為の文脈は、さしあたり思念を通じてだけ、行為の現在へとやってくる。すでに生起した行為はもはや定在していないし、これから生起する行為は定在しようもないからである。結局、思念のはたきはつぎのふたつであろう——一方で（過去の行為の）了解づけ、もう一方で（未来の行為の）企図づけ。

このような両様の心的活動によって、思念はじぶんのなかで行為を統合づけうるわけだが、思念の与えるこの統合は、所詮、擬制的なものである。当の思念のはたき自身、たんにある行為の現在に属しているにすぎないのだから。（いまはそのつもりでいても、実際そのとおりに行為が展開するかどうかかわからない。）というわけで、思念は、ありうべき行為の統合構造を現在へむかってひき寄せられるものである。そして、このようなひき寄せを可能にし、そこに介在して行くのがおそらく、言語なのである。

ひとは10年も先の出来事を目標にしていま何事かに励んでみたり、ずっと昔のおこないが原因でいまこうする破目になったと考えてみたりすることができる。しかしそのことは、そのように長期にわたる行為のつながりそれ自体がほんとうに目標だとか原因だとかいう関係によって統合づけられている、ということのみではない。ただ思念が、特定の言語形式を介して思考可能なものとして、それを掴みとり、ひき寄せているということだけをい

き寄せる普遍的な形式であるが、それ以上のものではない。そこでもし、長大な行為連鎖の組みたてをそのような格関係によって分析する手続きをみつけようとしても、なかなかうまくいかないとなれば、それは、行為の格理論を格概念の適用範囲をこえてまで用いようとするからだとは考えられないだろうか？

*

格によって統合構造を分析しないとすると、行為の長大な連鎖をどう説明していけばよいのか？ ここではただその外せない着眼だけをいくつかのべておこう。

行為の連鎖が行為の現在（の至近）に収まりきらない場合には、行為の過程的な本性がすっかり露わとなる。行為者の思念は、行為を各現在ごと、（擬制的に）統合づけるだろうが、それでもそれら各現在ごとの思念が相互に整合的なものになるとは限らない。思念それ自身もまた行為と並行する過程であって、刻々にみずからを更新し、再生させてゆくからである。行為が一貫したものであるとき、思念は互いに整合的であると考えられるが、そのような整合性を与える集中と持続のありようを、われわれはそれとして探ってみなければならぬ——これがひとつの点。

過程的に実現されてゆく行為そのものは、行為主体の手許をはみだしそのとどで展開してゆく出来ごとである。このような出来ごとは、行為の実行可能条件によって、そのつど思念の描く像からいくぶんずれたものとして実現してゆく。行為の実行可能条件は、行為秩序にかけられる外的制約であるが、ふたいろに大別できる。ひとつは、行為が物的環境のなかで実現されなければなら

みしている。ひとは言語を駆使するので、どのような行為についても言及し、言表し、また思考することができる（前節の命題H3~H5を参照）。そうする結果、行為の長大な連鎖は、行為の現在のほうへとたぐり寄せられ、時間的な契機を喪いながら空間化されることになるだろう。このときに関与する普遍的な形式のひとつが、実は、いまままで問題になっていた格にほかならないのではないかと考えられる。（そしてまた、（深層）格以外にも、（深層の）時制や人称といった、言語に普遍的な諸現象が関与するものも、ここであると言えよう。）

このように考えてくると、行為の格理論が行為の統合構造を解明する作業のなかでどのような位置を占めるべきものかが、おのずとみえてくる。思うに、行為の格理論がそのまま行為分析に使えるのは、行為の現在（ないし、そのごく近辺）に限られるのではなからうか？ 格は、すでにのべたように、本質的には空間的であるが、行為の現在（の至近）では比較的良好な現実の秩序と合致することができる。（たとえば、へ鍵でドアをあける、へ喫茶店でA氏と会う……という具合に。）それはもちろん、そうした単純な行為が、言ってみれば文に近いものであって、思念の空間性をそのまま行為の時間性へと置きかえてゆくという統合構造を探ってもさしつかえない範囲であるため、にほかならない。文の場合、喋ろうと企図することと実際に発語することとのあいだの落差を（生成文法がそうしているように）無視したとしても、分析上問題を生じない。これに対するに、行為一般は、本質的に過程的であるがゆえに、これと違っている。格関係は、行為の現在にはたらく思念の用具であって、どんな行為の連鎖もひ

ないことにもとづく条件（技術的な制約条件）であり、もうひとつは、他の行為者の行為と関係しなければならぬことにもとづく条件（社会的な制約条件）である。（これらの条件を内的制約から区別して外的制約とよぶのは、行為を行わねばならぬ第一義的な規定因ではなくて、行為の実現を思念の描く像から外らせる二義的な規定因だからである。）これらの条件が作用する仕方を行為の具体的な様相に即して確定するというのが、もうひとつの点。

行為は、このようにして行為者の手許をはなれてある分だけ、集合的な過程にゆだねられ、外的な制約にまかされてある。このような制約条件を介して行為が互いの現在を包みあうところに、行為の連鎖構造が生じてくる（命題H9を参照）。連鎖構造は行為の集合性を秩序づけ、分業系をそこに析出させるであろう。分業系は、各人の行為の統合構造と直交する論理を含んでいるから、各人の行為秩序を脅かし、それと矛盾しかねない。——行為をこのように追究してゆくときはじめて、行為がさまざまに交錯する空間としての社会が、その本来の姿をわれわれの前に現わしはじめる。

分業系のあり方は、社会が各人に課する必然を代表するものであって、個々の行為を断片化する。各人は、行為の連鎖を一貫性あるものにしていく最低限の自己性を喪わないためにも、これに抗して、行為をその統合構造にむかって回収しなければならぬ。このような角逐が社会の現実であり、そこでは、行為・言語・認識がとどなく絡まりあっている。この三者は、互いを互いに交換しあうのだが、そうした交換の転換器のように、行為する各人

の身体がはたらいっている。(わたしの「記号空間論」は、こうした全貌にもっともよい見通しを与えるであろう。そのプランの一部については、稿をあらためてほどなく本誌で論じることになるかと思う。)

〈言語〉派行為論の戦略的位置

さて、これまで、そのごく輪郭を描いただけの、行為の理論的解明の試みが、その実どのような狙いを秘めた作業プランの一環であるのかを、ここでのべておくほうがよいかもしれない。

もちろんいま〈言語〉派行為論を構想する必要の裏には、(ひとつには)マルクシズムが目を蔽わせるほどに凋落・衰微し滯っているという実態がある。かつて新たな世紀を拓くかみえたマルクシズムはすでに、われわれの時代的現実に対処する有効な言説の体系の任にたえないことが、すっかり暴かれてしまった。わたしがどれほどマルクスのファンであるからといって、この事実を目をつむることはできない。実際、今日マルクシズムを名のる諸派諸傾向のあらかたは、明瞭な思想上の保守反動派として撲滅すべきものである。どんな運動であっても、その思想的な命脈が尽きたなら、いかなる自己倫理によろうと、集団的規律によろうと、権力装置によろうと、ましていわんや心情の加担によろうと、到底その実質を維持できるわけがない。

マルクシズム瓦解の様相をもう少し詳しくのべてみる。わたしの考えでは、これを、まず①価値学説の崩壊、それに関連して②権力論の倒解、両者を根拠づける③自然哲学の解体、の三層に区

分しておさえるのがよい。

言うまでもなく、マルクシズムの言説体系は、それが現実的であることの根拠を、「資本論」の体系が妥当であることにおいている。この批判的書物は、資本制メカニズムにそのひとつの描像を与え、それを解析するところから一連の結論を導きだした。その出発点は、(資本制)生産システムにおいて〈価値〉が成立することである。ここから、剰余価値、搾取、……等の概念が順次その内実をえてゆくことになる。ではこの出発点は、揺るぎないものであろうか? 「資本論」の仕事は当時もちろん、在来のあらゆる古典派の仕事をもふまえた最高水準の学的達成であった。が、いまもその地位をそのままに保っているわけではない。マルクスの弟子どもがぼやぼやしているうちに、限界革命やそれにつづく諸々の革新を経た(近代)経済学は、今日とくに、「資本論」の理論上の含意などほぼ余すところなく解明し尽くしている立場にある。たとえば Morishima [1975] によれば、「資本論」が(暗黙のうちに)前提に描いていたのは、「マルクス・フォン・ノイマンモデル」ともよぶべき線型の再生産システムなのだ、このモデルでよく検べてみると、〈価値〉を定義できるのは現実性の乏しい不自然な仮定をいくつも採用する場合に限られる。それ以外のケース(あるいは非線型のモデルなど)ではそもそも、はじめから〈価値〉の概念が定義不能とならざるをえない。(この事情は、マルクス(流)の経済分析が南北間の場合のような効率の異なる生産システムが互いに関係する場合を扱えない事情にも通じる。元来〈価値〉論のこの難点は、リカードの国際体系論である比較生産費説の論理構成のなかにすでにひそんでいたのだ

が、「資本論」では主題化されないままであった。)価値学説が資本制メカニズムの解明と必然的な結びつきのないきわめて限定された射程の仮説系にすぎないことは、いまや衆目の一致するところとなりつつある。(もちろんマルクシズムの側から、「資本論」を書き直して、巻き返しをはかる余地もないではなからうが、教条にとられ愚図揃いな大勢からみて、まったく望み薄である。)マルクシズムの言説の効力(の一半)は、〈価値〉概念をなしくずしに実体視するところに根ざしてきたから、価値学説がひ弱な仮説系にすぎないということになると、たちまち深刻な困難にみまわれる。〈価値〉概念が揺らぐならば、それから派生する概念系列も連動して揺らいでしまうから、プロレタリアの概念の成立もまた脅かされる。このように、経済諸範疇がストラップ化してしまったので、それに対応する政治的諸テーゼ、たとえば、コミニズムを実現するためプロレタリアによる革命と独裁とを経由すべし、とするマルクシズム政治戦略の基本命題にしてもまたその根拠が危ういものになる。(マルクスが必ずしも完成させなかった)権力論は、土台/上部構造図式・暴力装置説・階級闘争史観の複合態として伝わっているが、このような粗放な言説体系は、少しぐらい取り繕って見たところで、さっぱり有効な理論のかたちになりそうにない。

マルクシズムの権力論をとらえている錯誤の根は深いので、ここでその詳細にわたることにはできないが、わたしの理解によるなら、それは、もとをたせば、マルクス(流)の自然哲学が偏頗であることにもとづく。ひとこと言うなら、その人間・社会理解には、言語そのほか一連の社会形象に対する目配りも、必要な

形式的視点も、そっくり欠けているのだ。(それというのも、理念にすぎない自然を実体視してしまうからである。)それなのに資本制を批判しきろうとするところから、理論上の無理が生じてくる。だから疎外論にしても、ほんとうは人間の行為や労働に関する形式的(「記号論的」)な考察により本質規定を下すところから出発しなければならぬと思うのに、古典派の価値学説と接合してみたりするのだし、人間の観念的な活動や記号現象を系統的に論じる方法を開発する径路を確保しなければならぬのに、無方法なまま即物的な権力論に直通してしまったりするのである。マルクス(マルクシズム)の言説体系は、前世紀のもっとも輝かしい理論的所産であったけれども、この百年のあいだに、その遺産はすっかり喰い潰されてしまった。いまやこのようなマルクシズムの言説体系の、全崩壊を告げねばならない。われわれのなすべきことは、何か?

マルクシズムを撲滅し去るという企図は、それにとって代わるいっそう強力な批判的社会理論をうち樹てるのでなければ、達成されない。これは口にするのははばかられるほどの大業であるけれども、そろそろその機運がそここにほの見えてきたようだ、というのがわたしの感触である。そうしたひとつの立場、〈言語〉派社会学にもとづくわたしの「記号空間論」が、この企図にいささかなりとも寄与するところがあれば、言うことはない。

マルクスは、十九世紀的な言説編成の限界内においてであったが、人類学にも経済学にも十分な理解を示し、両者に重要な方法上の位置を与えた点で、希有の洞察に恵まれた思想家であった。われわれも彼のこの眼球の動き具合だけは、持ちつつづけるべきで

ための道程の、これはささやかな一步をしるした小編である。
(完)

*今回分の草稿に目を通して有益な批判を寄せられた巨明志ほかの諸氏に感謝します。

〔図表出典〕〈1〉〈6〉: Leroy-Gourin/〈7〉: Lenneberg/〈8〉、〈10〉〈12〉: 秋元/〈9〉: Brain/〈13〉: 笹沼。

〔文 献〕

- 秋元波留夫 一九三五、「失行症」、金原商店。↓一九七六、東京大学出版会。
Brain, Lord 1965 *Speech Disorders* - Aphasia, Apraxia and Agnosia - (2nd ed.), Butterworth & Co. 一九七八、松本秀夫他訳、「失語症」、東京大学出版会。
Chomsky, Noam 1959, "A Review of B.F. Skinner's *Verbal Behavior*", *Language* 35-1: 26-58.
橋爪大三郎 一九七三、「初期レヴィストロース研究」『親族の基本構造』を中心にして、未発表。
一九七七 a、「記号空間論(素描)」、未発表。
一九七七 b、「言語派社会学の方法論的基礎」、未発表。
一九七八、「記号空間論」の基本視座、「ソシオロゴス」2: 1-10。
一九七九 a、「言語派法理論: 略説」、「ソシオロゴス」3: 1-15。
一九七九 b、「チンパンジーは語る」か、「止揚」31: 39-44。
神尾昭雄 一九七九、「失語症患者の統語能力の障害」自由発語の症例分析、笹沼(編)一九七九・七九-一三八。
小室直樹 一九七八、「インターディンプリナリー研究発展のため」、『季刊 NIRA』512: 55-67。

あろう。そのマルクスに比してわれわれは、かずかずの知見において較べものにならないほど有利な地点にいる。へ言語派行為論とは、記号論、文法理論、神経学、発達理論、その他種々の知見を利用して、行為の形式的な記述をなすとげようとする、へ言語派社会学の基礎部門である。この議論がめざすところは、ひとつには、マルクス主義による労働観の批判的解体にある。マルクス主義による労働の概念は、へ価値と結びついてはなはだ量的であり、形態学的な分析がおろそかにされていた。それに対して、へ言語派行為論の、行為の形式的記述が成功するなら、疎外概念を、価値学説から完全に切りはなして、記号論的な根拠のうえに据え直すこともできるかもしれない。たとえば、資本制的な分業系の編成が行為の統合構造に与える偏倚を疎外と定義する、という具合に。これにさらに、行為の格理論によるような、言語と行為との実質的な相関にかんする主張が相ともなうならば、こうした偏倚が心的世界の変歪や潰乱と結びついてゆくさまを、実証的な根拠をあげながら議論することが可能となるかもしれない。いったいに、人間の労働行為を、言語や他の諸表現と関連させながらとらえるというのでなければ、人間の現実をかくも交容させてしまう資本の運行法則を、創造的な思索の射程圏内にふたたびおさめることなど、できようはずがないだろう。

こうして、へ言語派行為論をはじめ、資本制システムを記号論的に解明しようとする試みの趣意は、それを身体の監察機構として暴きたすことにはかならない。なおも人類の上に、野放図な時代の命脈をもって猖獗する資本制メカニズムを、再びわれわれの構想力のなかにひきつりこみ、その諸々の現実と格闘してゆく

Lerroy-Gourin, E.H. 1967 *Biological Foundations of Language*, J. Wiley & Sons.
一九七四、佐藤方哉・神尾昭雄訳、「言語の生物学的基礎」大修館書店。
Lerroy-Gourin, A. 1964/1965 *Le geste et la parole* (2 vols), Editions Alvin Michel.
一九七三、荒木幸訳、「身ざらふ言葉」新報社。
Morishima, Michio 1973 *Marx's Economics: A Dual Theory of Value and Growth*, C.U.P.,
一九七四、高須賀義博訳、「マルクスの経済学へ価値と成長の二重の理論」、『東洋経済新報社』。
Needham, Rodney 1962 *Structure and Sentiment: A Test Case in Social Anthropology*, U.C.P.,
一九七七、三上瞬子訳、「構造と感情」弘文堂。
大橋博司 一九六〇、「失語・失行・失認」医学書院。
笹沼澄子(編) 一九七九、「失語症とその治療」大修館書店
盛山和夫 一九七八、「規範形成過程に関するノート」
Homans vs. Levi-Strauss 論争(即ち)、『ソシオロゴス』2: 1-19。
巨明志 一九七八、「行為の格理論ノート(その1)」、(その2)、『未発表』。
一九七九、「行為の記号論へ」、「ソシオロゴス」3: 1-13。
Wlodarczyk, A. 1977 "Essai de la sémiologie préhistorique: pour une théorie des signes classiques",
林みどり訳、「先史時代の記号学試論へ人類最初の描記符号の理論のために」、『エビステマー』317: 21-245。